

「協働」と「連携」によるまちづくり⑬
和歌山県田辺市の観光振興事業

「持続的な観光地づくり」を目指す

田辺市熊野ツーリズムビューローの取り組み



【写真】

- 1 熊野本宮大社を訪れる外国人観光客
- 2 合併後に、英語併記の統一した看板を整備
- 3 紀伊田辺駅隣にある案内所。英語に堪能なスタッフが多い
- 4 滝尾王子周辺の古道
- 5 伏拝王子の石祠
- 6 田辺湾の天神崎。日本ナショナルトラスト運動先駆けの地

戦略的な観光振興事業で大きな成果を上げ、世界旅行ツーリズム協会(WTTC)の第12回「明日へのツーリズム賞」の最終選考団体にノミネートされるなど、国際的にも注目を集めている田辺市熊野ツーリズムビューローの事例を紹介する。



「世界遺産登録」と「市町村合併」が契機

いわゆる「熊野古道」とは、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の「熊野三山」への参詣道を指し、「中辺路」、「大辺路」、「小辺路」といった道の名前が今でも残っている。なかでも王子と呼ばれる小さな社が点在して続く「中辺路」は、その代表的な古道である。

三重、奈良、和歌山の3県にまたがる紀伊山地は、8世紀ごろにはすでに「熊野」と呼ばれており、「八咫鳥」神話にあるように、神々が鎮まる特別な場所とされ、古くから人々の信仰を集めていた。

その中心地が「熊野三山」で、

9世紀ごろから貴族や武士、さらには庶民まで数多くの人々が、この地を目指すようになる。人々は、「神仏習合」の地として、熊野速玉大社で前世の罪を浄め、熊野那智大社で現世の縁を結び、熊野本宮大社で来世を救済されると信じていた。その賑わいは、巡礼者が道に連なる様子から「蟻の熊野詣」と例えられた。

平成16年7月、3つの霊場(吉野・大峯 熊野三山、高野山)と、参詣道(熊野参詣道、大峯奥駈道、高野山町石道)が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産(文化遺



■田辺市情報■

【人口】76,793人

(平成28年7月末現在)

【面積】1,026.91km²

【発電所データ】

(株)関西電力 柳瀬・甲斐川・殿山水力発電所

(株)電源開発 十津川第二水力発電所

【本特集問合せ先】

一般社団法人 田辺市熊野ツーリズムビューロー

☎0739-26-9025



産)に登録された。

翌平成17年5月、田辺市と日高郡龍神村・西牟婁郡中辺路町・大塔村・東牟婁郡本宮町が合併。和歌山県の面積の約22%を占め、参詣道として最も往時の面影を残す「中辺路」がすっぽりと入る、新・田辺市が誕生した。

この「世界遺産登録」と「合併」が、新・田辺市の産業振興や観光振興を大きく変える契機となる。特に観光振興については「世界遺産登録」を機に、そのあり方が大きな課題となっていた。

合併前、5つの旧市町村には、それぞれに観光協会があり、活動

内容や求められる役割も異なっていた。そのため、「田辺市観光協会連絡協議会」を設立して協議を重ねた結果、背景の異なる観光協会を合併するのではなく、むしろその独自性を尊重して、行政や各観光協会、各種団体などと連携し、民間レベルで広域的な観光振興を図る中間支援組織の設立が必要、との結論に至る。

こうして平成18年4月、田辺市熊野ツーリズムビューロー(以下ビューロー)が誕生する。会長には旧田辺市の観光協会の会長であった多田稔子さんが就任した。

当初、市観光振興課からの出向



田辺市熊野ツーリズムビューロー会長 多田 稔子 さん

スタッフ(事務局長を含め、多田さんたちが直面した課題は、世界遺産登録を機に「複数の行政区にまたがる『熊野古道』の観光PRと、その文化を守りつつ進める観光振興のあり方はどうあるべきか」というものであった。

「熊野古道」というのは、大勢の観光客が一度に訪れるような観光の形態にそぐわないと思っていました。目的をもって訪れないと、その良さがわからないと思っていましたし、地域住民の方々にも同じような思いがあったと思います」と、多田さんは言う。

熊野古道館



発心門王子周辺の古道

事実、世界遺産に登録されるや、熊野地域にはバスを連ねた観光客が殺到し、『熊野古道』を1時間ほど歩いただけで、次の場所に移動していった。訪れる側にとっては『熊野古道』は単なる「山道」という印象のようで、迎え入れた住民にとっても、熊野の良さを理解していただけないのでは、という無力感が残った。

古来、『熊野古道』は参詣道であり、「巡礼」の道であった。その道をつなぐ集落における人々の生活文化、信仰が密接にからみ合い、熊野地域は独特の文化的景観を生み出していた。世界遺産に登録された主な要因も、ここにあった。

そうしたことから、多田さんたちスタッフは「熊野古道を含め、この熊野地域の良さを理解していただける人々に、特に、外国の旅行慣れた人々に、『巡礼地』として

「外国人目線」でのプロモーションを開始

そこで、国際観光推進員として採用したのがカナダ人のブラッド・トウル氏であった。現在は、プロモーション事業部長として活躍している。

トウル氏は母国で大学を卒業後、旧本宮町の英語指導助手(ALT)として勤務した後、母国で観光ガイドやスキーインストラクターを務めた。その間、何度も熊野を訪れており、熊野の歴史や文化についての膨大な書物にも目を通していった。そして、何より熊野を愛していた。

「もともと世界遺産のコンセプトは保存・保全。観光はそのためのひとつのツールです。人がいないとまちはなくなり、文化もなくなる。まちを守るには人が必要で、

の『世界遺産・熊野古道』を発信していこう」という方向性を見出していった。また、「他と競合しない旅行者」として、欧州・米国・豪州の個人旅行者をターゲットに絞ることにした。

そして、その基本的なスタンスを『ブーム』より『ルーツ』、『乱開発』より『保全・保存』、『マス』より『個人』、『世界に開かれた観光地を目指す』ということに置いたのである。

人が生活していくためには仕事が必要。国など行政からお金を投入されて行うような観光振興ではなく、地域の住民から仕事を創り、地域振興をしていこうとする取り組みが必要です。訪問客の満足度にも耳を傾けるが、最も大事なのは、受け入れる住民の満足度です。受け入れる側がハッピーでなければ、私たちは成功しないし、生き残れない。住んでいて満足できる地域をつくるのが大事なのです」



田辺市熊野ツーリズムビューロープロモーション事業部長 ブラッド・トウル さん



伏拝王子から見る紀伊山地



滝尻王子にある世界遺産登録の記念碑



熊野本宮大社 社殿



大注連縄(おおしめなわ)のかかる熊野本宮大社の門





古道の民家の壁に掲げられている案内表示
(発心門王子周辺)

と、トウルさんは語る。

そうしたトウルさんの思いをもとに、3年かけて、外国人対応の観光情報の収集整理・発信、受け入れ側の外国人対応のレベルアップ、海外への観光プロモーションなどの事業を展開していった。

なかでも、受け入れ側のレベルアップ事業では、ワークショップ形式の研修会の開催は延べ60回に及んだ。宿泊関係者、交通関係者、観光協会のスタッフから行政職員さらには熊野本宮大社の神職や巫女さんにまで、外国人観光客に対する受け入れ側の課題について議論を重ね、意識を高めていった。

「外国人観光客対応セミナー」の開催や「語り部・ガイド」の研修も行った。それに加え、英語が話せなくても、指差しで外国人とのコミュニケーションが図れる「通訳シート」の作成では、業種別にキメの細かい研修を行った。また、商工会議所と連携してグルメマップを作成し、市街地の飲食店23店舗に「英語メニュー」を用意した。

観光情報の収集整理・発信では、ホームページやパンフレットの多言語化に取り組んだ。

「中辺路」のルートマップ



設立当時は、外国人向けの情報発信といえば、英語のパンフレットと簡単なウェブサイトのみのであった。そこで、作成するパンフレット、マップ、ポスターのすべてを日英併記し、多言語表記(英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語の6ヶ国語)のウェブサイトの構築を行った。

ここで注目すべきは、英語のサイトでは、日本語のサイトと必ずしも対にしていないことだ。留意したことは、外国人の感性に合わせて、熊野の文化を理解してもらうことであった。日本の歴史や文化に知識のない外国人にも理解できるように、時には一から文章を作成した。

そうした作業を積み重ねていくうちに、外国人受け入れに消極的だった事業者も、この取り組みに

参加するようになり、ビューローに情報掲載を希望する宿が増加していく。同時に『熊野古道』のルート上の宿が増加していく、中辺路の「滝尻王子」から熊野本宮大社までの3泊4日で歩く基本のルートが完成していった。現在では、この基本ルートにバスの使用や泊数などをアレンジして、観光客が独自のルートを作ることも可能になっている。

こうした「情報発信」の努力によって、『熊野古道』は2011年発売の『ミシュラン・グリーン・ガイド・ジャポン』において、「わざわざ旅行する価値がある」を意味する「三ツ星」を獲得するにいたる。熊野は世界的に著名な観光地になっていった。

プレスツアーや旅行者へのエージェンツツアーの開催、さらには田辺市が観光交流協定を締結しているスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市と民間レベルの共同プロモーションも行った。

ちなみに、サンティアゴ・デ・コンポステーラ市は、『熊野古道』と同じく「巡礼の道」として世界遺産登録されており、現在、「数百キロにもおよぶ道」の登録はこの2か所だけである。両者は、道中の各所でスタンプを押し、両方の道を踏破したことを証明する『共通巡礼手帳』を発行している。

着地型観光業へ進出して 地域住民が参加するシステムを開発

平成22年、ビューローは一般社団法人の法人格を取得し、第2種旅行業を取得して、着地型の旅行業をスタートする。

その背景は、熊野地域の情報発信だけでは、増加する観光客を十分に満足させる対応が困難になったからである。情報の発信だけではなく、「運ぶ仕組み」を作る必要性が出てきたのだ。

ワンストップで旅行手配、モデルコースやオリジナルツアーの提案など、新たな旅行商品の開発を行う、いわゆる「着地型観光」の推進であった。

その事業の中核になっているのが、『熊野トラベル』というインターネット上の予約システムの運営だ。熊野地域の小さな事業者は、大手の旅行会社の契約対象にはそぐわない。旅行者が、地元の宿やガイドなどの事業者と直接予約で

きるようにシステムを整えた。地元の人々に直接利益が落ちる仕組みとしたのだ。そのため、ビューローは時間をかけて、事業者との打ち合わせを行い、価格や手数料等を決めていった。

これは、「草の根レベルの予約システム」といわれ、「地域住民が観光開発のプロセスに積極的に参加する」という意味で、地域コミュニティベースの観光モデルとして注目されているものだ。



「熊野トラベル」のホームページ

「明日へのツーリズム賞」の 最終選考団体に選ばれる

平成24年、ビューローは世界旅行ツーリズム協議会(WTTC)が主催する「明日へのツーリズム賞」(選考会の「デステイネーションの管理」部門において、日本では

初めて最終選考3団体にノミネートされる。まさに、地域コミュニティレベルでの観光の取り組みが、国際的に評価されたのであった。今年、設立10周年を迎えた。昨

年度の観光客総数は約380万人。外国人宿泊者数は世界遺産登録直後の平成17年に比べ、約19倍（和歌山県観光動態調査）にもなった。

「私たちが、成果をあげることができた大きな理由は、『民間』であることと、ブラッド・トウルという人材を得たことです」と、

多田さんはこの10年を振り返る。

前述のようにビューローは民間の中間支援組織として、世界遺産に絞って広域で事業展開してきた。単に、外国人スタッフの登用という意味では、トウルさんのような人材はなかなか見つからない。

「ブラッドは、日本の文化や歴史をはじめ、信仰に関する知識が豊富で、それを外国人にわかるようなPRの方法を常に考えています。そして、なにより熊野が好きで、日本人スタッフよりその魅力をおかっているのではと思う」と多田さんは言う。

「ビューローの事業展開によって、住民の生活にも変化が出てきました」と言うのは、田辺市観光振興課長の小川雅則さんだ。

例えば、古道を歩く客の大きい



熊野本宮大社を参詣する人

きるところまではいっていない。そもそも、儲かる事業ではないが、地域に貢献しているという自負があり、少なくとも自立する方向で、着地型の商品を増やし



田辺市観光振興課長 小川 雅則さん

荷物を次の宿へ運んだりするサービスを行う事業者が出てきた。また、関西大学や追手門学院大学、和歌山大学などとの連携事業も進んでおり、本宮地区の宿の繁忙期に、大学生のインターンシップを受け入れ、学生が宿に就職した、と

世界遺産の保全・保存と観光業を両立させていく

現在のスタッフの総数は、市からの出向者（事務局長）を含めて13名。英語など語学に堪能なスタッフが多い。

『熊野トラベル』の平成27年度の国内外旅行者の取り扱い実績は7,912人で、売上高は約1億9,500万円。ビューローの経営は、プロモーション委託費で成り立っているところがあり、まだ自立できるところまではいっていない。そもそも、儲かる事業ではないが、地域に貢献しているという自負があり、少なくとも自立する方向で、着地型の商品を増やし

いうような例や、市内の闘雞神社の祭りの担い手や、扇ヶ浜海水浴場の海の家の経営を大学生と共同で行う動きも出てきた。

地域住民の意識の変化も大きい。

「こんな田舎にも外国人が来る」ことで、地域への愛着や誇りをより多くの方が持つようになってきた。外国人にも慣れてきて、外国語が話せなくても積極的に対応する人も増えている。

まさに、交流人口の増加が地域にもたらした効果だと小川さんは語る。

世界遺産の保全・保存と観光業を

たり、「大辺路」などのルート開拓を進めていく展望を持つている。

しかし、観光客の数を増やしていくことよりも大事なことは、世界遺産としての熊野地域の保全・保存と、産業としての観光をどのように両立させていくかだ。

「サントピアゴ市は『道』の価値を大切にしています。そこに人が歩いているからこそ、『道』の風景が完成する、と教えられました。巡礼道を歩く人は、サントピアゴを訪れる観光客の5〜6%しかいないそうですが、かの地は、その人たちが大事にしています。『熊野古道』は、現代に生きる世界遺産でなくてはならないと思い

ます」と、語る多田さんの言葉は示唆に富んでいる。

「観光」という言葉は「光を観る」と書く。文字通り解釈すれば、訪れる側は、訪れた地域の光り輝く自然、産物、人々を、注意深く見て、楽しみ、学ぶということだ。そうした「観ること」刺激によって、自らや自らの地域を見つめ直す契機となる。

同時に、受け入れる側は常に自らの地域を見つめ直し、資源化し、それを磨き続けて、自らの意思に基づいてコントロールして「観せて」いかねばならない。

その両者の「まなざし」の交差するところが、田辺市熊野ツーリズムビューローが目指す「持続可能な観光地づくり」ということなのであろう。



「高原霧の里休憩所」



発心門王子の休憩所とトイレ



中辺路の滝尻王子。王子とは熊野権現の御子神を祀る分社。ここから熊野本宮大社までの古道を2泊3日で歩くのが一般的ルート



伏拝王子。熊野九十九王子と呼ばれる分社の多くはこうした小規模なもの。難行苦行の信仰の道を繋ぐために設けられている



「中辺路」ルートの「高原霧の里休憩所」からの眺望



市内の闘雞（とうけい）神社。世界遺産へ追加登録を目指している

欧米や豪州からの観光客が多い